

ロールシャッハ法における 色彩反応のキーワード調査の追加分析

——図版と色彩の種類の観点から——

安田 傑*

抄録：本研究では、ロールシャッハ法の初学者における習得効率の向上を図る一環として、色彩反応と評定されやすい反応内容が多く産出される図版と色彩の種類を調査した。安田（2012）による色彩反応のキーワード調査で用いられた 2003 反応分の言語データに対し、テキストマイニングの一手法である形態素解析を用いて、各図版における色名とキーワードの対応性の高さを分析した。その結果、各図版における主要な色彩反応と、その色彩反応が産出されやすい反応領域の色彩が示された。また、第Ⅱ図版では「血」「火」「内臓」「恐怖」など、危険性を喚起する色彩反応が多く産出されていたが、第Ⅲ図版以降、そのような反応傾向は低下することが示唆された。このような系列の特徴は、第Ⅱ図版で生じやすい「色彩ショック」現象を、赤色領域に対する回避行動と見なす Rorschach の見解を支持するものと考えられた。

問 題

ロールシャッハ法は臨床現場における代表的な投射法であり、クライアントの心理状態やパーソナリティなど、広範囲にわたるアセスメントツールとして用いられている。2010 年に行われた臨床心理士に対するアンケート調査（小川・岩佐・李・今野・大久保，2011）では、ロールシャッハ法は心理臨床家が最低限取得すべき心理検査として最も多くの回答を集め（分析対象者 307 名中 188 名が回答）、この回答傾向は回答者が基盤とする心理臨床理論（精神力動，人間性，行動・認知行動，家族・ブリーフ，その他）が異なっているにもかかわらず、一貫してみられていた。これらの結果は、心理検査におけるロールシャッハ法のニーズの高さを示している。

しかし、心理検査の利用頻度調査では、1986 年、1997 年、2004 年のロールシャッハ法の利用頻度はそれぞれ 1 位、2 位、3 位（小川，2008）、2010 年には 6 位（小川ら，2011）であり、心理検査の中でもロールシャッハ法の利用順位は徐々に低下してきている。ロールシャッハ法のニーズと利用実情の差異には様々な要因があると思われるが、その一つとして、ロールシャッハ法は心理検査の中でも特に習得が難しいために、臨床実践においてロールシャッハ法を有意義に利用できる心理臨床家が減少している可能性が考えられる。加藤・森本・古田・乾（2013）も同様に、ロールシャッハ法の習得の難しさが初学者のロールシャッハ離れを引き起こす可能性を指摘しており、ロールシャッハ法の効率的な習得につながる研究の必要性を主張している。ロールシャッハ法を取り

巻くこれらの現状を踏まえ、本研究ではロールシャッハ法の効率的な習得に寄与する研究を行う。

ロールシャッハ法の実施法の中でも習得効率性の高い方法として、包括システム（Exner, 2002 中村他訳 2009）が挙げられる。この実施法には、ロールシャッハ変数を解釈する順番や解釈の基準値を定めた「クラスター解釈」と呼ばれる量的分析法が採用されており、ロールシャッハ法に習熟していない心理士でも臨床で必要とされる最低限の解釈が可能とされている（高橋・高橋・西尾，2007）。ただし、このクラスター解釈が適切に行われるためには、その前段階でロールシャッハ反応の評定（coding）が適切に行われている必要がある。

Exner は、包括システムの評定対象を、反応領域（どこに見えるのか）、決定因子（どこからそう見えるのか）、反応内容（それは何か）の 3 種類に大別し、反応領域と反応内容に関しては容易に評定できると述べた。それに対し決定因子の評定では、反応の根拠という、クライアントがあまり意識していない点を評定対象とするため難易度が高く、クライアントの自発的な言語反応のみでは情報不足で評定が困難な場合が多い。このような場合、検査者はクライアントに非誘導的な質問（inquiry）を行い、反応産出時のクライアントの知覚過程に関して情報を収集することで、適切に評定を行う必要がある。ただし、検査者のロールシャッハ法の経験年数が少ないほど質問の仕方に困惑する検査者が多く、特に初めての施行時では 41.2% の検査者が質問の仕方に困難を感じた経験を有しているとの調査結果もあることから（駒屋・吉野・福森，2011）、質問の仕方にも十分な

*関西学院大学文学部総合心理科学学科助手

習熟が必要とされることが伺える。また、Lis, Parolin, Calvo, Zennaro & Meyer (2007) の調査では、経験の浅い検査者によるロールシャッハ法は質問の実施が不十分であり、決定因子を十分に検出することができず、評定の信頼性が低くなることが示された。ただし、決定因子の確認に慎重になりすぎるあまり、決定因子とは関係性が弱い単語に対してまで過剰に質問してしまうと、検査の負担が大きくなることに加え、質問によって反応産出時の知覚体験が歪められて引き出されてしまうという問題も指摘されている (Exner, 2002; 高橋・高橋・西尾, 2006 など)。そのため、決定因子に関する質問は、特定の決定因子の存在を示している可能性が高い単語を中心に、過不足なく行われることが望ましい。このような質問の対象とすべき単語を Exner (2002) はキーワードと呼び、例として「きれいな」「美しい」「上品な」「でこぼこした」「暗い」「荒々しい」「傷ついた」「明るい」「サーカス」「パーティ」「悲しみ」「幸福」「ピクニック」「毛皮」「血」の15単語を紹介している。この他にも、高橋・高橋・西尾 (2006) は「花」「彫刻」「岩」「大男」という4種類のキーワードを紹介している。

安田 (2012) は、ロールシャッハ法の適切な実施のためにはキーワードの体系的調査が必要であると主張した。そして出現頻度の高さや解釈における重要性、評定者間一貫性の低さ (すなわち評定難易度の高さ) を踏まえ、決定因子の中でも色彩反応 (反応知覚にインクプロットの色彩要素が利用された反応) に焦点を当てたキーワード調査を行った。この調査では、1985~2010年の間に本邦で出版されたロールシャッハ法の学術図書29冊・査読つき学術雑誌26冊から集められた2003反応を対象に、テキストマイニングの手法の一つである形態素解析が実施され、出現頻度が高く色彩反応に含まれやすい52種類の形態素カテゴリー (安田, 2012 では形態素群と表記) が抽出された。この52カテゴリーに対して質的分析や外的妥当性検証を行ったところ、「花名」、「火」、「水」など、51カテゴリーが色彩反応のキーワードとして十分な妥当性・効率性を有していることが示された。また、色彩反応に関するこれらのキーワードが、どの図版で多く出現するかについても明らかにされた。

ただし、安田の研究では色彩の種類とキーワードの対応関係について検討されていない。色彩反応は、利用された色彩の種類によって全く異なる反応内容が産出される。そのため、各キーワードと関係性が強い色彩の種類を把握しておくことで、言語反応に含まれているキーワードに対して質問を行うべきか否かを、当該キーワードが知覚されている領域の色から判断可能になると思われる (例えば、色彩反応のキーワードである「水」反応が赤色の領域に産出された場合、色彩とキーワードの不一致の観点から、この「水」反応について色彩の可能性を

検討する必要性は低いと考えられる)。このような色彩反応のキーワードと色彩の種類の対応性について図版ごとに調査を行うことで、図版-色彩-キーワードの対応関係が強く、かつ産出頻度も高い色彩反応 (すなわち当該図版における主要な色彩反応) を把握することが可能になり、ロールシャッハ法の初学者が行う質問の効率化・節約化に寄与する知見が得られると思われる。加えて、各図版におけるキーワードと色彩の種類の対応関係を明らかにすることで、ロールシャッハ法の色彩反応の性質解明につながる重要な手掛かりが得られる可能性もある。

そこで本研究では、安田 (2012) と同じくロールシャッハ法の言語データに対して形態素解析の手続きを用い、各図版における色彩反応キーワードと色彩の種類の対応関係について調査を行う。

方 法

本研究では、安田 (2012) による研究で分析対象となった2003反応の言語データを、再度、分析対象として扱った。この2003反応は、238名分 (うち、再検査28名分; 男性107名分, 女性117名分, 性別未記載14名分; 成人167名分, 未成年58名分, 年代未記載13名分; 健常群31名分, 臨床群207名分; ロールシャッハ実施法は包括システム・片口法・名大法・阪大法など) のプロトコルに含まれている反応のうち、総色彩図版である第Ⅷ図版, 第Ⅸ図版, 第Ⅹ図版で産出されたすべての反応と、黒赤図版である第Ⅱ図版, 第Ⅲ図版において、ロケーションチャート, コーディング, 言語表現などから有色彩領域を含む事が明らかな反応である。ただし、質問未実施や掲載省略のために質問段階での言語記録が不明な反応は除外され、2003反応には含まれていない。分析対象反応の基本属性について、Table 1に示す。

Table 1 分析対象反応の基本属性

	色彩反応 (%)	非色彩反応 (%)	合計
全分析対象	869 (43.4%)	1134 (56.6%)	2003
図版別			
第Ⅱ図版	156 (45.3%)	188 (54.7%)	344
第Ⅲ図版	93 (43.7%)	120 (56.3%)	213
第Ⅷ図版	192 (41.1%)	275 (58.9%)	467
第Ⅸ図版	215 (50.5%)	211 (49.5%)	426
第Ⅹ図版	213 (38.5%)	340 (61.5%)	553
群別			
健常群	96 (49.2%)	99 (50.8%)	195
臨床群	773 (42.8%)	1035 (57.2%)	1808

(安田, 2012 から引用)

結果と考察

1. 分析の前処理

言語データについて、同義異表記の表記法を統一し、反応段階と質問段階における分析対象者の発言を反応ごとにまとめたものを分析単位とした。テキストマイニングアプリケーションとして TinyTextMiner (松村・三浦, 2009) を用い、1 反応内での形態素の有無に着目した形態素解析により名詞と形容詞を抽出したところ、3603 種類の形態素が確認された。

2. 色名カテゴリー

抽出された形態素の中には 50 種類の色名が含まれていた。清野・島森 (2005) を参考に、色名と対応するマンセル表色系の色相に基づきカテゴリー化した。ただし、マンセル表色系において桃色は赤色系 (R)、茶色は橙色系 (YR) に含まれるが、両色はそれぞれマンセル表色系が示す基本色系とは異なる反応内容が見られやすいという著者の経験に基づき、桃色系カテゴリーと茶色系カテゴリーとして独立的に扱うこととした。また、清野・島森によれば、空色は紫青色系 (PB) に含まれるが、ロールシャッハ法において空色は青色系 (B) と同様の領域を示すことが多いと考えられることから、本研究では青色系カテゴリーに含めた。色相表記のない無彩色に関しては、明度に基づき白色系、黒色系、その中間色である灰色系の 3 カテゴリーに分類した。マンセル表色系の表記対象外であるメタリックカラーに関する 2 種類の形態素も、1 つのカテゴリーとして扱った。また、色名そのものではないが、複数の色彩が利用されていることを示す 3 種類の形態素と、2 種類以上の形態素

により複数の色彩利用を示す形態素の複合 (例えば「いろいろな+色」) 3 種類を 1 つのカテゴリーに集約した。

このようにしてまとめられた 13 種類の色名カテゴリーのそれぞれが色彩反応と非色彩反応に含まれている割合について、フィッシャーの正確確率検定により比較したところ、9 種類の色名カテゴリーにおいて色彩反応に含まれる割合が有意に高いことが確認された。13 種類の色名カテゴリーに含まれる色名、そして上記の検定の結果を Table 2 に示す。なお、本研究で対象となった色彩反応のうち、色名カテゴリーが 1 種類以上含まれていたのは 545 反応 (全色彩反応の 62.7%) であるのに対し、「色がきれい」や「この色からそう見えた」などの説明により、色名の言及がなされないまま色彩反応が評定されたのは 324 反応 (全色彩反応の 37.3%) であった。また、インクプロットには本来含まれていないメタリックカラーに関して言及がされた 3 反応の内訳は、「帽子についている金色の襟章と形が似ている」のように、反応内容の一般的性質を示す際にメタリックカラーが言及された 1 反応、そして、第Ⅹ図版上部の灰色領域を「ここに銀色の塔のような、重要なものがある」「銀色の服を着た人が世界を作ろうとしている」と説明するように、反応内容の神秘性・権威性を高めるために灰色を銀色として表現していた 2 反応であった。

インクプロットの色彩は図版によって異なることから、色彩反応の言語データに含まれる色名カテゴリーも図版によって異なる。そこで、色彩反応に含まれる色名カテゴリーを図版ごとに調査した結果を Table 3 に示す。黒赤図版である第Ⅱ図版と第Ⅲ図版での色彩反応には赤色系カテゴリーが多く含まれていたのに対し、緑色彩図版である第Ⅷ図版以降は色名カテゴリーに多様性が

Table 2 色名カテゴリーの種類と、色彩反応・非色彩反応に含まれる数

色名カテゴリー (色相)	色彩	色彩反応 (<i>n</i> = 869)	非色彩反応 (<i>n</i> = 1134)	Fisher's exact test
赤色系 (R)	赤・赤色・赤い・赤み・真っ赤・赤黒い・朱色	336 (38.7%)	96 (8.5%)	<i>p</i> < .001
桃色系 (R)	桃色・ピンク色・ピンク	49 (5.6%)	12 (1.1%)	<i>p</i> < .001
橙色系 (YR)	橙色・オレンジ色 [Ⓐ] ・アンズ色・肌色・柿色	53 (6.1%)	16 (1.4%)	<i>p</i> < .001
茶色系 (YR)	茶色・茶色い・茶系統・褐色	18 (2.1%)	6 (0.5%)	<i>p</i> = .003
黄色系 (Y)	黄・黄色・黄色い	48 (5.5%)	8 (0.7%)	<i>p</i> < .001
緑色系 (G)	緑・緑色・グリーン	101 (11.6%)	27 (2.4%)	<i>p</i> < .001
青色系 (B・PB)	青・青色・青い・青っぽい・青み・ブルー・水色・空色 [Ⓑ]	66 (7.6%)	35 (3.1%)	<i>p</i> < .001
紫色系 (P)	紫・紫色	5 (0.6%)	1 (0.1%)	n.s.
白色系	白・白色・白い・白っぽい・真っ白	30 (3.5%)	35 (3.1%)	n.s.
黒色系	黒・黒色・黒い・黒っぽい・真っ黒	77 (8.9%)	43 (3.8%)	<i>p</i> < .001
灰色系	灰色・グレー・鼠色	12 (1.4%)	7 (0.6%)	n.s.
メタリックカラー系	金色・銀色	1 (0.1%)	2 (0.2%)	n.s.
多色系	カラフル・色合い・色とりどり・いろいろな色・いろいろな色・様々な色	48 (5.5%)	5 (0.4%)	<i>p</i> < .001

[Ⓐ] 本研究で抽出された形態素「オレンジ」は全て、果物ではなく色名を意味していたため、「オレンジ色」表記に統合した

[Ⓑ] マンセル表色系での色相は PB に該当するが、青色領域での言及が多いため青色系カテゴリーに含めた

Table 3 各図版の色彩反応に含まれる色名カテゴリー数

色名カテゴリー	第Ⅱ図版 (n = 156)	第Ⅲ図版 (n = 93)	第Ⅷ図版 (n = 192)	第Ⅸ図版 (n = 215)	第Ⅹ図版 (n = 213)
赤色系	119 (76.3%)	68 (73.1%)	53 (27.6%)	47 (21.9%)	49 (23.0%)
桃色系	0 (0.0%)	1 (1.1%)	16 (8.3%)	26 (12.1%)	6 (2.8%)
橙色系	1 (0.6%)	0 (0.0%)	18 (9.4%)	21 (9.8%)	13 (6.1%)
茶色系	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.5%)	6 (2.8%)	11 (5.2%)
黄色系	1 (0.6%)	1 (1.1%)	5 (2.6%)	2 (0.9%)	39 (18.3%)
緑色系	0 (0.0%)	0 (0.0%)	22 (11.5%)	54 (25.1%)	25 (11.7%)
青色系	2 (1.3%)	0 (0.0%)	18 (9.4%)	10 (4.7%)	36 (16.9%)
紫色系	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (0.9%)	3 (1.4%)
白色系	12 (7.7%)	5 (5.4%)	6 (3.1%)	4 (1.9%)	3 (1.4%)
黒色系	41 (26.3%)	9 (9.7%)	9 (4.7%)	2 (0.9%)	16 (7.5%)
灰色系	1 (0.6%)	0 (0.0%)	8 (4.2%)	1 (0.5%)	2 (0.9%)
メタリックカラー系	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.5%)
多色系	1 (0.6%)	0 (0.0%)	9 (4.7%)	8 (3.7%)	30 (14.1%)

濃い灰色：色彩反応における出現率が20%以上の色名カテゴリー

薄い灰色：色彩反応における出現率が10%以上の色名カテゴリー

見られ、図版の色彩特徴に沿った色名カテゴリーが反応に用いられることが確認された。ただし、どの図版においても色彩反応の20%以上に赤色系カテゴリーが含まれており、ロールシャッハ図版における赤色領域の誘目性・反応想起性の強さが伺える。加えて、本研究では第Ⅱ図版での色彩反応において、黒色系カテゴリーが特に多く含まれていることが確認された。ロールシャッハ法の一般的な評定法では、インクプロットの黒色性が反応に用いられた場合、その反応は無彩色反応と評定され色彩反応には含まれない。すなわち、黒色系カテゴリーの言及は、色彩反応の評定に直接的な影響を及ぼすことはない。にもかかわらず、色彩反応の多くに黒色系カテゴリーが含まれた原因として、第Ⅱ図版での色彩利用に関して赤色系カテゴリーが言及された際に、黒色系カテゴリーが共起する頻度が高いことが考えられる。実際に、第Ⅱ図版の色彩反応では41反応に黒色系カテゴリーが含まれていたが、このうちの36反応において、赤色系カテゴリーも含まれていた。残りの5反応では赤色系カテゴリーの言及は見られなかったものの、「血」や「メイク」として赤色が利用されていることが明らかであったために色彩反応が評定されていた。なお、黒色系カテゴリーと赤色系カテゴリーの高頻度の共起が、第Ⅱ図版においては多く見られ、同じ黒赤図版である第Ⅲ図版ではあまり見られなかった理由としては、第Ⅱ図版は第Ⅲ図版のように赤色領域と黒色領域が完全には分かれておらず、両色が混ざり合った領域も存在するため、説明の際に赤色と黒色を明言して区別しようとする姿勢が働いたのではないかと考えられる。ただし、インクプロットの大部分を占める黒色領域の陰気なイメージが、赤色領域に「血」などの不快な印象を持つ反応の知覚を促進し

た可能性も否定できず、この点について更なる調査が必要であろう。

なお、第Ⅱ図版や第Ⅲ図版では、赤色系以外の有彩色は存在しないにもかかわらず、本研究では青色系や黄色系の言及が4反応において確認された。これらの反応の言語データを確認したところ、1反応において「青い蝶は見たことがあるが、このような赤い蝶は見たことない。」のように、反応内容の色彩が一般的ではないことを示す際に青色系カテゴリーが用いられていた。また、黒色領域や白色領域を「青インク」「黄色い花」「黄色いモンシロチョウ」と呼ぶ、いわゆる色彩投影反応が3反応含まれていた。

3. 各図版での色名カテゴリーとキーワードの対応

安田(2012)により色彩反応のキーワードとして提案された51種類の形態素カテゴリーが、どの色名カテゴリーと高い対応関係がみられるか調査を行った。具体的には、各図版の色彩反応において、各色名カテゴリーとの共起率が3%以上の形態素カテゴリーを抽出した(Table 4)。抽出された形態素カテゴリーは計40種類(第Ⅱ図版では7種類、第Ⅲ図版では14種類、第Ⅷ図版では6種類、第Ⅸ図版では7種類、第Ⅹ図版では6種類)であった。この40種類の色彩-形態素カテゴリー対応に該当していた色彩反応は271反応であり、言語データに色名を含む545の色彩反応のうちの49.7%を占めていた。

この40種類の色彩-形態素カテゴリー対応を、著者の経験も踏まえてまとめ、各図版における主要な色彩反応を述べるとすれば、第Ⅱ図版は赤色領域での「血」「火」「内臓」、第Ⅲ図版は赤色領域での「魂」「火」「血」

Table 4 各図版の色彩反応において、色名カテゴリーとの共起率が3%以上の形態素カテゴリー

第Ⅱ図版		第Ⅲ図版		第Ⅷ図版			第Ⅸ図版				第Ⅹ図版					
赤色系	黒色系	赤色系	黒色系	赤色系	桃色系	緑色系	赤色系	桃色系	橙色系	緑色系	赤色系	黄色系	緑色系	青色系	黒色系	多色系
血	血	魂	火	花部	花部	木	火	花部	火	花部	いろいろ	いろいろ	葉っぱ	いろいろ	いろいろ	いろいろ
イメージ		火		イメージ		花部				葉っぱ	火	花部		恐怖		
火		恐怖		きれい		葉っぱ				花名	きれい	葉っぱ		花部		
内臓		リボン		内臓						木						
ピエロ		血								火						
絵の具		イメージ								凄い						
恐怖		内臓								イメージ						
		凄														
		祭り														
		心														
		感情														
		雰囲気														
		楽しい														
		光														
7種		14種		6種			7種				6種					

共起率3%以上の形態素カテゴリーが存在する色名カテゴリーのみ表記。

当該図版の色彩反応において、特定の色名カテゴリーとの共起率が10%以上であった形態素カテゴリーは、特に灰色セルで示す。

形態素カテゴリーの順番は、色名カテゴリーとの共起率の高さに対応している。

「リボン」「内臓」「祭り（に伴う、楽しさ・雰囲気など）」などを主要な色彩反応として挙げることができよう。そして、第Ⅷ図版は赤色領域での「内臓」や、図版を逆向きとして緑領域と赤色領域を利用した「花（に伴う、葉っぱ・木）」、第Ⅸ図版は緑領域と赤領域を利用した「花（や葉っぱ・木）」や、赤色領域での「火（緑領域の木が燃えている場合も多い）」、第Ⅹ図版は、各色領域を利用した「いろいろな○○」、黄色領域と青色領域と緑色領域を用いた「花（や葉っぱ）」、そして赤色領域での「火」などが挙げられる。複数の図版にわたって多く見られる色彩反応を、ロールシャッハ法における最も中心的な色彩反応と見なすならば、「血」「内臓」「火」「花」の4種類を挙げるのが妥当かもしれない。

なお、40種類の図版－色彩－形態素カテゴリー対応の性質を図版ごとに概観すると、第Ⅱ図版では「血」「火」「内臓」「恐怖」のように、危険性と関連する形態素カテゴリーが半数以上を占めている。このような形態素カテゴリーは第Ⅲ図版にも多く含まれるものの、「祭り」や「楽しさ」や「光」など、ポジティブな性質を有する形態素カテゴリーも確認されるようになる。総色彩図版である第Ⅷ図版以降はインクプロットが多色になり、緑色を含むようにもなることから、色名カテゴリーは花関連の形態素カテゴリーと共起する傾向が見られた。また、第Ⅹ図版はインクプロットの形態的・色彩的な散らばりが強いのか、多様性に基づく「いろいろ」という形態素カテゴリーが多く確認された。なお、第Ⅷ図版以降は、第Ⅱ図版や第Ⅲ図版で多く見られた危険性

と関連する形態素カテゴリーの種類は減少していた。これは、ロールシャッハ法の前半に提示される黒赤図版に対しては危険性が喚起されるものの、図版が進むにつれ危険性の喚起が低下するという、系列分析的な性質を示している可能性がある。この性質は第Ⅱ図版で反応の遅延や生産性の低下が生じる「色彩ショック」と呼ばれる現象を、赤色領域に対する回避行動の観点から説明するRorschachの理論（1921 鈴木訳 1998）を支持するものである。

4. 本研究の知見の適用における注意

本研究の主要な目的は、一般的にどのような図版・色彩領域に産出されたキーワードが色彩反応と評定されやすいかを調査することで、ロールシャッハ法の初学者が効率よく質問を行うための情報を提供することであった。調査により、各図版で特定の色彩と結びつく可能性が高く、出現頻度も高いキーワードが示された。このように図版ごとの主要な色彩反応を明らかにしておくことは、ロールシャッハ法の初学者が色彩反応に関する質問を行う際に有益であろう。

ただし、実際の検査場面で、本研究の知見を機械的に利用して質問を行うことは、決定因子の取りこぼしにつながるだけではなく、ロールシャッハ法の質的な性質（例えば、検査場面における検査者－クライエント間の力動性）を損なうものである。本研究の知見はあくまで参考にとどめつつ、実際の検査場面では状況に応じて柔軟に対応する必要があることは、言うまでもない。

謝辞

本研究を実施するきっかけを作ってくださった大阪大学の松村真宏先生，関西学院大学の三浦麻子先生，浜松医科大学子どもこころの発達研究センターの田中善大先生に，深く感謝の意を表します。

引用文献

- Exner, J. E. (2002). *The Rorschach: A comprehensive system Vol.1* (4th ed.). New Jersey: John Wiley & Sons, Inc. (エクスナー J. E. 中村紀子・野田昌道 (訳) (2009): ロールシャッハ・テスト 包括システムの基礎と解釈の原理 金剛出版)
- 加藤佑昌・森本麻穂・古田雅明・乾吉佑 (2013). ロールシャッハ・テストに関するスモール・ステップ式教育法の検討 専修人間科学論集心理学篇, 3, 23-31.
- 駒屋雄高・吉野菜穂子・福森崇貴 (2011). ロールシャッハ法の学びに関する調査報告 青山学院大学教育人間科学部紀要, 2, 123-132.
- 松村真宏・三浦麻子 (2009). 人文・社会科学のためのテキストマイニング 誠信書房
- 小川俊樹 (2008). 今日の投映法をめぐって 小川俊樹 (編) 現代のエスプリ別冊 投映法の現在 至文堂 pp.5-20.
- 小川俊樹・岩佐和典・李貞美・今野仁博・大久保智紗 (2011). 心理臨床に必要な心理査定教育に関する調査研究 第1回日本臨床心理士養成大学院協議会研究助成・研究成果報告書
- Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungs-diagnostischen Rxperiments*. Bern: Hans Huber. (ロールシャッハ, H. 鈴木睦夫 (訳) (1998). 精神診断学 金子書房)
- 清野恒介・島森功 (2005). 色名事典 新紀元社
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2006). ロールシャッハ・テスト実施法 金剛出版
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2007). ロールシャッハ・テスト解釈法 金剛出版
- 安田傑 (2012). ロールシャッハ法における，色彩反応の可能性を示すキーワードの調査 心理臨床学研究, 30, 577-582.